

説一切有部の大乘批判

— ayogaśūnyatāvādin —

吉 元 信 行

中観・瑜伽行唯識学派等の大乘諸論書では、説一切有部を代表とするアビダルマ思想に対する批判がかなりの比重を占めている。これに対して、説一切有部の論書では、大乘に対する批判はほとんど見られず、専ら他の小乗諸部派や仏教以外の学派に対する批判に終始して、むしろ、当時当然行われていた筈の大乘仏教の思想は、意識的に等閑に付されたかのようである。そして、当時なされていた説一切有部からの大乘に対する批判は、かえつて、龍樹や世親によつて著された大乘諸論書の中に記されている討論を通して窺い知るのみである。この様な傾向は、龍樹などによつて空思想の体系が大成されてから二世紀も過ぎ、さらに無著によつて唯識思想の体系化が始まつた頃の述作である俱舍論や順正理論に至るまで認められるところである。

ところが、これらの論書よりかなり後に述作されたと考えられ、説一切有部の正統派に属するとされているアビダルマ

ディーパとその釈(以下ADVと略す¹⁾)では、はつきりと大乘仏教が意識せられ、痛烈な批判がなされている。その批判も、説一切有部より、経部を経由して、Vaiṣṭhikaの ayogaśūnyatāvādin に墮落したと決めつけられた世親個人に対する非難という形をとっているのが大きな特色となつている。このうち、Vaiṣṭhikaとは、説一切有部の側から大乘教徒を「異教徒」という意味で軽蔑の意図をこめて呼んだ呼称であつた。このことについては別に論及した²⁾。

それでは、ADVの著者ディーパカーラが同様に大乘教徒に対して投げかけた ayogaśūnyatāvādin という呼称は一体何を意味するのであるうか。ディーパカーラは ayogaśūnyatā について次の様に記す。

アビダルマに無知 (sammoḥa) の印になる論題によつて、自らも「無知の」烙印を押された「世親」は、ayogaśūnyatāの断崖に向つて示していることを示していることになる。(ADV, p. 33³⁾)

こゝは、根見説と識見説の論争の結論として述べられているところである。世親は俱舍論において、根・識見の論争を嘲笑して、眼・色・識の三事重合による仮設 (upacāra) によって見ると主張する経部説を引用することによって経部を支持する (AK. p. 31)。ところが、ディパーカラは、「かくしてここで、かの大徳「世親」は、重合の要素たる作用 (kriyā) の否定 (apaharaṇa) を為す」(ADV. p. 33) というように俱舍論の所説を要約して批判しようとする。すなわち、俱舍論では、見るものと見られるものは功能をもたず (iriv-yāpāra) 法と因果であるのみで仮説にすぎない (AK. p. 31) と言う。称友は「功能をもたず」という語を「このことによつて……作用を否定する」(AKV. p. 82) と註釈している。ディパーカラは、説一切有部にとっては重要な概念の一つである作用をすら否定せんとする経部説を、「アピダルマに無知の印になる論題」であるにとらえ、この説に加担する世親を「ayogastūyāta の断崖に向つてゐる」と非難するのである。

このことから ayogastūyāta とは、世親が転向していつた大乘仏教の教義の特色を示したものであると見る事ができる。

俱舍論主世親が、大乘、中でも瑜伽行唯識学派に転向したことは、ADV における三世実有論の最後のところでも言及されている⁽³⁾。そこでは、作用と法の実体・自性についての論議のあと、次の様に説かれる。

ここで、説一切有部より墮落した Vaitulika は言った。「我々も三自性を主張せんとする」と。これに対して言うべきである。妄想 (parikalpa) によつて愚人の心を執著させることで世間は充ちている。しかし、賢明な意で把握する妄想というものはあり得ない。

さて、汝らによつて妄想されたこれらの三自性は前に否認された。同様に他の非有 (asaṁ) についての妄想も駆逐すべきである。以上のことは、さらに、俱舍論主「世親」に対し、「[三]世 (adhvaṇ) によつて無知の烙印を押すことである」(ADV. p. 282) ジャイニ博士も指摘する如く、こゝは、俱舍論主世親が、説一切有部より墮落して、Vaitulika と称される大乘教徒に転向したことを示唆する有力な典拠となるところである。この文中における三自性によつて、ADV では何の説明もなされてはいないが、これが、瑜伽行唯識学派の重要な教義として、世親が無著より承けついで体系化した三性説を指していることは明白である。世親の作であるとされる三性論第一四偈では次の様に頌せられる。

妄想された対象は「主・客の」二種よりなるから、その「二種が」非有といふこと (asaṁ) は一つの存在 (Bhava) であるから。愚者たちによつて妄想された自性 (遍計所執性) は、「一つで」(あつてしかも) 一つのを本質とすると考えられた。(TSK. p. 126)

先に引用した ADV における三自性否定説は、まさしくこゝ

の三性論の偈を前提としているようである。この第一四偈は、妄想されたあり方をもつ存在としての遍計所執性のことを言っている。言語によつて把握される主観・客観というような経験的世界はすべて非有であるという点で一なる存在(ekadha)‘すなわち自性(svabhava)であると説かれた。

このことをディーパカラは、「妄想によつて愚人の心を執著させること」と把握する。そして、このことから、他の非有についての妄想も駆逐すべきであるという。他の非有についての妄想とは、三性論第一九、二〇兩偈に説かれる如く、依他起性と円成実性がそれぞれ無(abhava)を自性とすると言かれた(TSK. p. 127)ことであらう。そこに言う妄想とは愚人の心を執着させるものであつて、賢者の心で把える場合には妄想ということはありません。ディーパカラは主張するのである。更にディーパカラは、三自性は前に否認されたと言っているが、残念なことに ADV 現存部分に見られないので、おそらく散佚部分にあつたのであらう。ただ、ディーパ第三一五偈に「縁生であるものは自性として存在しない」(ADV. p. 276)との大乘教徒(Yanulika)の所説が引かれ、以下それに対する反論と自性の意味についての論究がなされているが、それについては別の機会に触れたい。

それでは、俱舍論主世親が転向していつた大乘仏教の教義の特徴を一言でディーパカラが表現したと思われる ayoga-

説一切有部の大乘批判(吉 元)

śūnyatā とはいかなる意味をもつものであるか。この語は、空性を説く中観・唯識両学派の用語にも認められないものである。この ayogaśūnyatā の意味について、ADV の校訂者 Jaini 博士は、ayoga eva śūnyatā であるとして、縁起と縁生の因果関係の否定そのものが空性であり、この用語は中観・唯識両学派双方の空性論あるいは無自性論のことであると結論する。これに対して、Warder 博士は、これを、筋の通らない邪悪な空性を説く論者という意味にとり、虚無主義を説く大乘への蔑称であると見なす。ここで両博士は ayoga という語の意味と ayoga-śūnyatā という語のコンパウンドの理解を異にしている。

そこで筆者は、ADV における他の部分の ayoga の用法について調べてみた。ADV では、ayoga の意味について詳しく説明しているところが二ヶ所ある。その第一は、第四章業品における律儀の捨について言及しているところである。ディーパ第一六八偈では次の様に頌せられる。

欲界繫なる律儀の棄捨は、学処の捨置などによる。またある人々は極重罪(pātānyā)によるとらう。しかし他の人々は、結びつかなう(ayoga)からそうせむとらう。(ADV. p. 131)

説一切有部の教義によると、欲界繫の八種の律儀が棄捨されるのは、学処の捨置など五種の原因によるとされる。ところが、経部は四極重罪の中のいずれか一つを犯しても比丘・

沙弥でなくなると説いた。⁽⁸⁾ そのことが ADV の偈では、ある人の説として紹介される。その経部説に反対する形で、他の人々は、極重罪の一一と比丘・沙弥であることは結びつかない(ayoga)からそうではないと言う。そこでディーバカ―ラは結びつかないということについて次の様に頌す。

結びつかない(ayoga)とは、一部(amsu)【の罪】が滅亡するから【といつても】、重罪そのものがなくなるわけではない【と
いうことである】。(ADV. p. 132⁹)

この部分の長行によつて理解すると、結びつかない(ayoga)とは、一部分が消失するから全体が減ずるというような関係の否定である。経部は、四波羅夷罪の一つを犯しても比丘や沙弥ではなくなると主張した。しかし、有部は、一部の罪を犯すことは全律儀の棄捨とは関係しないと反論したのである。以上の如く、ayogaとは、一部の捨がそのまま全体の捨に通じるという様な結びつかないこと、すなわち不合理なことを意味するのである。

ADVにおけるayogaについてのもう一つの用例は、第五種眠品における、過去・未来の有無に関する論議の中で見られるものである。周知の如く、経部は、過去・未来は無いと主張し、これに対して有部は、無いはずの過去・未来が所縁となつて有として認識されるはずはないと非難した。ADVでも同様に、次の如く経部の矛盾をつこうとする。

いかにして「汝の言う」無(abhava)は、有(bhava)とならぬいか。「有となるためには」住・勢力・作用と「結びつくべきであるのにそのいずれとも」結びつかない(ayoga)から「有とはならないであらう」。(ADV. p. 275⁴)

無といえは、生や住という勢力たる作用を持たぬものであるから、それが原因となつて認識を起すことはありえない。無とは、有部の考え方で言えば滅尽を伴つて生じたもの(savīdāya)である。滅尽を伴つた法には原因も滅尽することになる。原因もないのにどうして非事が実事として認識されるのかと論難するのである。ここにおけるayogaとは「結びつかない」ということで、非事が実事となるという様な不合理なことも意味している(cf. ADV. p. 275)。

以上の如くayogaが、無関係あるいは結びつかないということと不合理という意味で用いられたとすれば、sūnyataとはいかなる意味であらうか。周知の如く、有部では空(sūnya)を相対的なものであると見ている。そして、sūnyataは「空であること」すなわち空観という意味であつて、大乘における「空性」という様な意味はもたせない。ADVでは空について次の様に説明している。

すなわち、ある様式(prakāra)として諸行は空である。人間の阿頼耶識や虚妄分別などの邪まな妄想として「空」である。ある【様式】で【諸行は】不空(asūnya)である。すなわち、自相と

共相として「空」である。(ADY. p. 270^{a-5})

この有部の空観は唯識の空観とはまったく相反している。中辺分別論では、「それ故すべしものは空でもなく不空でもなくといわれる」(MVS. p. 6)と説かれているからである。このことを唯識では空性 (śūnyatā) という。その空性について中辺分別論では次の様に説く。

dvayābhavo hy abhavasya bhavaḥ śūnyasya lakṣanam / na bhāvo nāpi cābhavaḥ na pṛthaktrāyika-lakṣanam //

(MVS. p. 36)

ここで、世親及び安慧の理解によると、この偈における śūnyatā は śūnyatā のことび、空性の特徴は主観と客観が無 (abhāva) であると同時に、その無が有 (bhāva) であることであるといわれる (MVS. pp. 6-7)。このように無が有であるとか、あるいは空でも不空でもないという特質をもつのが唯識学派における空性 (śūnyatā) であった。前に述べた如く、説一切有部では、この様な空観は決して許されないと考えている。この様な考え方は、先にあげた、一部が全体であるとか、あるいは非事が実事となるというような不合理な考え方と同じであり、*ayoga* である。唯識学派の説く空性はその様な不合理な空性であるから、唯識学派に転向せんとする俱舍論主世親を不合理な空性 (ayogaśūnyatā) の断崖に向つていると非難するのである。そして、その世親の転向していった

唯識学派のことを *Vaiṭulika* (大乘教徒) の不合理な空性を説く論者という意味で、*ayogaśūnyatāvādin* と蔑如をこめて呼んだのである。ここに、ADY に於ける *ayoga-śūnyatā* という用語の上に、説一切有部の大乘に対する批判精神の一端を眺めてみた。

※略号 紙幅の都合で省略

- 1 ADY に於けるは拙稿「フビダルマディーパにおける三世実有論」印仏研 28-1、三三三、三三五頁参照。
- 2 拙稿「説一切有部の大乘批判——*Vaiṭulika*——」真宗教学研究 4 (昭55)。
- 3 拙稿「フビダルマディーパにおける三世実有論」(前出)三三三～三五頁参照。
- 4 Jaini, P. S., "On the Theory of Two Vasubandhus," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XXI-1 (1958), p. 49.
- 5 *ibid.* p. 52, ADY. introduction, pp. 123-124.
- 6 Warder, A. K. *Indian Buddhism*, Motilal, 1970, p. 414.
- 7 AK. p. 222, 大正・29・七九 a b. 律儀の捨に關しての俱舍論とADYの所説の比較については、三友健容「フビダルマディーパ業品の検討」(昭54)七八～七九頁参照。
- 8 光記、宝疏の説による(『仏教大系、俱舍論第三』中山書房、昭53、一〇七、一一二頁)。

(昭和五五年度文部省科学研究費一般研究Bによる研究成果の一部)

(大谷大学講師)